

文字摺通信

第 109 号
2026年 4月 1日
発行:文字摺歴史文化社

於:岡部大壇愛宕神社で、猪に乗った天部

摩利支天像を初めて見ました!

2月上旬に福島市岡部字大壇の愛宕神社で、初めて「摩利支天像」を見せていただきました。愛宕神社の御神体は「勝軍地蔵」です。御神体の写真撮影は御遠慮ですが、隣の厨子に入った「摩利支天像」は秘仏ではないので特別に写真撮影を許可していただきました。

摩利支天像は、猪の背に載った一面六臂の像でした。

摩利支天は、陽炎・太陽の光を神格化したもので、その由来は古代インドの「リグ・ヴェーダ」に登場するウシャスという暁の女神だと考えられています。



陽炎は実体がないので捉えられないところから隠形の身で常に日天の前に疾行し、自在の力を持つところから日本では武士の間に

摩利支天信仰がありました。楠木正成は兜の中に摩利支天の小像を籠めていたといい、毛利元就は「摩利支天の旗」を旗印にしていました。

ここ愛宕神社の御神体（ご本尊？）の勝軍地蔵も武力の神（仏？）で、摩利支天も武力の神（仏？）

であるところが面白いです。また地蔵菩薩と天部の像を納めていることは江戸時代までの神仏混淆思想そのものであり、神仏分離以降の近代社会に昔の信仰の形をとどめていることも貴重です。

